

ミニ講座

相談支援について ④

相談支援のステップ

インテーク（最初の面談）→アセスメント→支援計画作成→モニタリング

今回は、アセスメントの2回目になります。

2. アセスメント (ii)

3)問題と課題の意味の確認

アセスメントを行う際、問題と課題が区別され、整理ができていないと支援計画を作成する上で混乱が起きてしまいます。そこで、改めて、問題と課題について整理します。

●**問題**→ あるべき姿と現状との負のギャップ

改善を必要とする現状

●**課題** → 問題を解決するために何をすべきか、ということを設定したもの

問題を解決するための取り組み

「問題」は事象「課題」は取組

「問題」は自分に課せられない「課題」は自分に課せられている

「課題」は「問題」を解決するための手段

問題と課題について、整理ができたでしょうか。それでは、ここからお話を始めます。

生活している上で起こるいろいろな問題に対して、自分自身での対応や環境（家族、近隣住民、社会資源、介護サービス、助け合い等）の支援により、生活する上での困った状態を解決していければ、よいのですが、それがうまくいかないことがあります。ここで、重要なのは、前回お話したように、デマンドに目を向けるのではなく、ニーズを正確に捉えるということです。

みなさんは、就職したいという要望があります。ただ、実は、職が無いということの他にも、生活上の問題（改善を必要とする現状）をお持ちではないでしょうか？ 例えば、住んでいる場所で、夜の騒音が酷く、十分な睡眠がとれないため、仕事に集中できず辞めることが多かった。などということです。この場合は、就労のための勉強をしたり、訓練を受けたりすることよりも、生活

環境を見直すことが必要になるわけです。

つまり、みなさんが抱えている問題点（上述の例では、夜の騒音による睡眠不足）が明確になると、それぞれの問題を解決するための課題（住環境の見直し）を設定し、支援チームのだれがどのように支援するかを具体的に決定することができます。一つ一つの問題に、このような作業を行うことにより支援計画ができあがっていくわけです。

4)アセスメントの視点

インタビューにより得られた情報をもとに、みなさんの状況分析を始めます。しかし、限られた情報の中ではみなさんのニーズを十分に把握できない場合もあります。また、みなさん自身も、自分の真のニーズを認識できていないこともあります。その際は、不十分かもしれませんが、分かった情報をもとに仮説を立てることになります。

そして、仮説に基づいて、新たな情報を収集します。これは、仮説の正否を判断するために必要な情報に的を絞った情報収集になります。この時、仮説によっては、専門性が必要な情報、分野にまたがる情報など、多岐にわたることがあります。そのため、必要に応じて多職種連携で情報を収集します。

このようにして、改善を必要とする現状の把握ができた段階で、支援計画を立てることになります。この時重要なことは、問題点の改善のみに着目した支援計画を立てるのではなく、その人らしい生活の実現を視野に入れた計画作成を目指すことです。そのためには、みなさんと環境の良き適合状態を支援チームで共有し、計画を立てる必要があります。

例えば、認知症高齢者の支援の際、その方自身の支援というより、その方の周りで、お世話をしている家族や地域の方々への支援に重きが置かれる場合があります。これは、その方自身が、自分の支援に対して意見を言えないからでもあります。

認知症という症状は生まれつきのものではなく、社会で働き結婚し家族を持ち子どもを育て自立させ、地域生活を送りながらやがて年をとり、ひとり暮らしになり物忘れが始まり、ゴミ捨てができなくなり家の中や周りがゴミだらけになってしまうといったことです。つまり、長い生活歴の中で、症状が生じ、

酷くなるというものです。

改善を必要とする現状のみに着目すれば、地域とトラブルを起こしている認知症の独居高齢者で施設に入所させたほうが良いということになってしまいます。ただ、その方の生活歴を紐解くことで、もし認知症になっていなければ、その方はどのような生活をしたかったのかを代弁することもできるはずです。

その方を「認知症の〇〇さん」と認識するのではなく、「長年地域生活をしてきた〇〇さんが認知症を発症して地域生活に支障が出ている状態にある」と認識し、〇〇さんのその人らしい生活をどのように支援するのかを考えることによって、本人中心の支援が組み立てられると思います。

私たちの目指すべき支援とは、就職さえすればよいという表面的な解決ではなく、みなさんの真のニーズ、より良い生活を行うため、みなさんの適正理解し、就職を考えるということだと考えています。